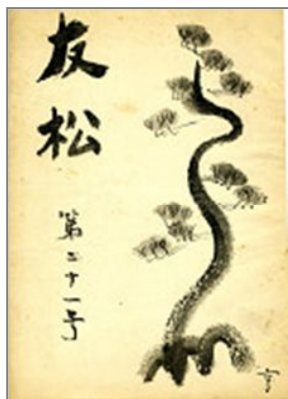


「友松」の変遷

No.7 平成 22 年 (2010) 9 月



昭和 11 年 (1936 年) 1 2 月 1 5 日発行 第 2 1 号
A5 版 総ページ 1 5 6 ページ 縦書き 一段または二段組み

< 主な内容 > (数字はページ数)

- * 会長挨拶 学校長挨拶(4) * 恩師寄稿・追懐等(19)
- 会員の寄稿(31) * 会員相談部規定・物故者・弔慰(4)
- * 教育春秋(9) * 会員感想(15) * 母校便り・各支部消息(32)
- * 会務・会計報告・役員名簿・会則等(13) * 編集後記(4)

会長の挨拶に、母校 6 0 周年記念事業が盛大に挙行され、奨学資金募集、友松会館の経営、会員の研修等の計画が次々と実行され、良い成果を収めていると書かれている。

友松会の会員は、4,000 名に達している。卒業生の大多数は初等中等の教育に従事しているものの、政治の世界で献身的に働いている者、経済界で奮闘している者等も数多く、それぞれの分野で活躍していることが挨拶文からうかがえる。

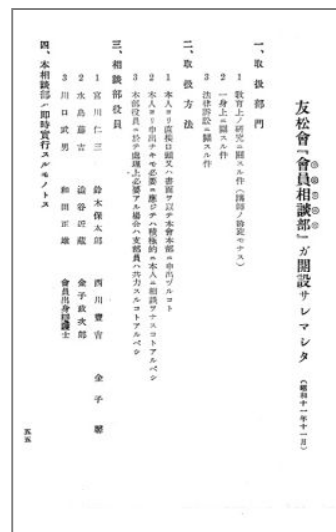
師範学校校長は「真にわが教育界は多事と云わねばならぬ」と挨拶の中で書いている。政府は、義務教育年限延長、小学校教員の全額国庫支弁を決めている。また「国家興隆の淵源は教育の振興に俟つ所大」

「国家百年の計たる教育においては、わが国本来の精神に立脚して、十分なる省察を加えて、確乎たる教育国策を樹立せねばならぬ」と力説している。

友松会「会員相談部」開設

右の記事は、「会員相談部」開設のお知らせ記事である。

- 1 取扱部門
 - ① 教育上の研究に関する件
 - ② 一身上に関する件
 - ③ 法律訴訟に関する件
- 2 取扱方法
 - ・本人より直接口頭又は書面を以って申し出ずること
- 3 相談部役員
 - ・会員出身弁護士と役員 9 名





弔 慰

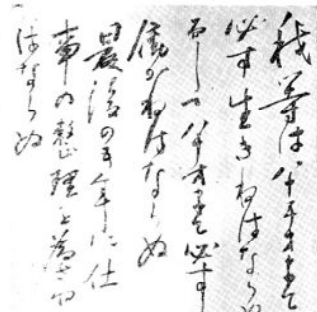
故鈴木友三郎氏を追懐して

育英書院 倉田 八十八

鈴木さんは我が友松會の大先輩で、殊に東京支部の會員... 昭和五年の夏、發病されてからは、その願々しい姿を再び會場に見ることが出来ませんでしたので、みんながさびしきうに「鈴木さんは？」と尋ねるのでした。その都度、これも今は故人となられた沼田博士や、今も元氣な小林房太郎さんが、よくその消息をつたへてくれました。「何に

せよ、七十をこえたから」と聞いて、よそながら楽しんで居りますように、こゝし七月十日、西大久保のお宅で、ついに永い眠につかれた。享年七十二。鈴木さんは慶應二年三月三十日、神奈川縣西多摩郡東秋留村雨間七六三番地中村卯兵衛氏の四男として生れ、明治十八年神奈川縣師範學校を卒業して、中野の協心小學校に教鞭をとつて居られました。同二十五年東京市神田區三河町の鈴木家に養子となり、同じ友松會員の故三樹一平氏と共に、明治二十九年の春、明治書院を創立されたのでした。それから、すつと三十三年、養家のため、明治書院のため、ひいては我が出版界のために盡された功績は決して少くありません。けれども、どちらかと言へば、ごく地味

な性格の持主でしたから、世間的には割合に開えて居りませんでした。三樹さんが亡くなった後、推されて明治書院の社長に就任された時、始めてその名を知った同業者すらあつたといふことです。しかし、明治書院が今日の大を成して居る裡には、創業者としての鈴木さん、女房役としての鈴木さん、社長としての鈴木さんが、興つて力あることは何人も首肯するところでありました。現在の明治書院の森下専務は、常に鈴木さんの徳をたへて、鈴木さんが書かれた訓言を表装して秘蔵して居られるさうです。さうして鈴木さんの令息敏三さんは、今日、三樹さんの令息退三さん愛治さんたちと一緒に、協力一致して明治書院の經營に當つて居られるさうです。聞いてうれい話です。明治書院創業當時のことを鈴木さんは次のやうに言ふて居られました。



（新沢氏下稿） 讀華氏郎三女木鈴故

當初三樹君も打續く不幸で貯蓄も無かつたらしい。僕も或る事業に敗した後なので餘裕頗る少なかつた。之が爲に初めには資金問題で非常に苦心した。年寄を入れた仕事でも無く、取引店があつた譯でも無く、店を分けてもらつたのでも、有力な資本家が付いて居た譯でもないから、これがほんとの獨立獨立と云つてもよい譯である。云々（杜川遺囑）それが今日では天下の明治書院として、堅實な出版書肆の第一に數へられるほどになつたのですから、鈴木さんも安心して大往生を遂げられたこと、存じます。（十月十五日）

鈴木友三郎氏は、慶応2年、神奈川県西多摩郡東秋留村の中村卯兵衛氏の四男に生まれ、明治18年神奈川県師範學校を卒業し、小学校で教鞭をとっていたが、明治25年、東京神田の鈴木家の養子となり、明治29年の春、鈴木氏は同じ會員の三樹一平氏と「明治書院」を創立した。それ以来30余年、養家のため「明治書院」のため、わが国出版会のために努力された。

昭和11年、当時の明治書院の専務は、常に鈴木さんの徳をたたえて、鈴木さんが書かれた訓言を表装して秘蔵していたそうである。

【編集後記】より

「内にありては、やがて国家の重任は双肩に負ふべき陛下の赤子の教養に日夜これ努め、外にあっては男女青年教育は申すに及ばず、広く社会の陣頭に立つて国氏を教化し、社会を指導しつつある會員諸賢、時流に棹さし、世相に鑑みて、或は国体明徴、選挙肅正、或は庶政一新、或は国民外交と、極めて多事多難或はな本年を、よくその職責を自覚して、その使命を全うせられ、誠に心残りなき本年でありました」と時勢を良く表現している。

「表紙絵は新進図画教育者中村亨君(昭和10卒)にお願いしたものであります」と記している。